小学館創造選書

有名作家が描いた子どもの姿

文学のなかの子ども

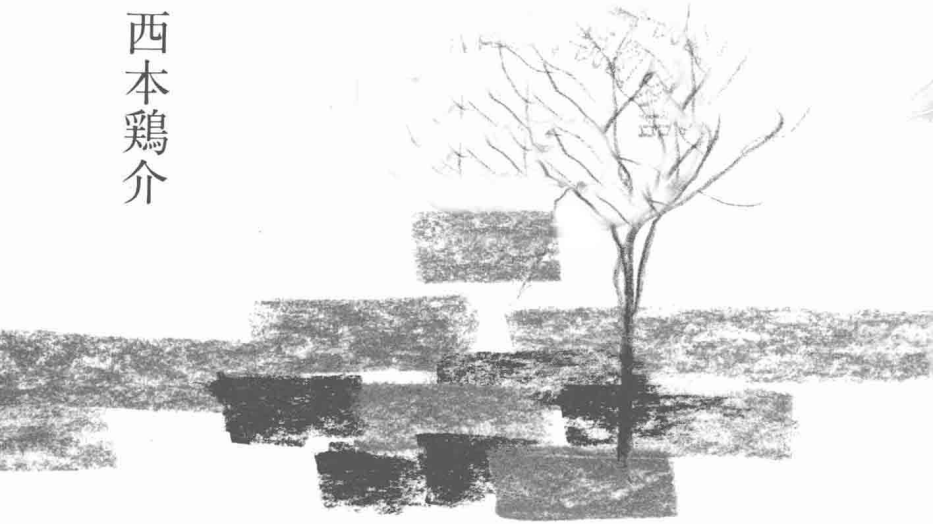
西本鶏介

小学館創造選書

有名作家が描いた子どもの姿

文学のなかの子ども

西本鶏介



911
小学館創造選書　第86巻
文学のなかの子ども
西本鶏介　著
東京　小学館　1984・12
208P　19.4×13.1cm

小学館創造選書　86
文学のなかの子ども　定価八八〇円
一九八四年十二月十日　初版第一刷発行
著者　西本鶏介
発行者　相賀徹夫
発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一（〒一〇一）
電話―東京〇三・二三〇・五五三九（編集）
五三三三（業務）　五七六四（販売）
振替・東京八―二〇〇
印刷　中央精版印刷株式会社
株式会社　東京印書館

＊製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。
＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

© 1984 SHOGAKUKAN Printed in Japan ISBN4-09-820086-4

文学のなかの子ども

——有名作家が描いた子どもの姿——

樋口一葉「たけくらべ」　未熟な愛 4
森鷗外「ヰタ・セクスアリス」　感情で学ぶ性 8
夏目漱石「硝子戸の中」　愛すべき母 12
中勘助「銀の匙」　小さな詩人 16
葛西善蔵「子をつれて」　父と子の絆 20
谷崎潤一郎「小さな王国」　権力の恐ろしさ 24
久米正雄「受験生の手記」　青春の挫折 28
室生犀星「性に眼覚める頃」　性の眼覚め 32
志賀直哉「小僧の神様」　人間の弱さ 36
豊島与志雄「白血球」　恐怖の幻想 40
宇野浩二「子を貸し屋」　大人への媚び 44
永井龍男「黒い御飯」　門出への贈り物 48
芥川龍之介「河童」　子どもへの涙 52
中野重治「春さきの風」　生命の詩 56
林芙美子「風琴と魚の町」　ユートピアへの心 60
上林暁「薔薇盗人」　花に通う心 64
坪田譲治「遊ぶ子供」　子どもの独立国 68

山本有三「真実一路」　真実を求めて　72
十和田操「判任官の子」　大人の虚勢　76
堀辰雄「幼年時代」　ままごと遊び　80
壺井栄「大根の葉」　祖母の愛　84
太宰治「おしゃれ童子」　若者のおしゃれ　88
岡本かの子「鮨」　本能としての愛　92
長谷健「あさくさの子供」　信頼される教師　96
川端康成「ゆくひと」　愛の痛み　100
石川淳「焼跡のイエス」　狼のエネルギー　104
織田作之助「六白金星」　抵抗の美学　108
平林たい子「鬼子母神」　継子への愛　112
田宮虎彦「絵本」　死を凝視する生　116
大岡昇平「父」　敵としての父　120
北杜夫「幽霊」　心の神話　124
由起しげ子「女中ッ子」　孤独との闘い　128
安部公房「棒」　父としての存在　132
石原慎太郎「太陽の季節」　怒れる若者　136
福永武彦「死神の馭者」　地獄の生　140
吉行淳之介「悪い夏」　秘密のにおい　144
大江健三郎「芽むしり仔撃ち」　自己と他者の関係　148
有吉佐和子「祈禱」　子どもへの祈り　152

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

庄野潤三「静物」　見せかけの幸福　156
開高健「裸の王様」　内心の欲求　160
河野多恵子「幼児狩り」　ものとして　164
三島由紀夫「雨のなかの噴水」　大人ぶった別れ　168
野坂昭如「子供は神の子」　悪魔になれる子供　172
古井由吉「子供たちの道」　たゆとう生命　176
立原正秋「冬の旅」　青春期の友情　180
井上ひさし「汚点」　肉親の中の友情　184
曽野綾子「太郎物語」　子どもの大人気　188
宮本輝「泥の河」　強靱なやさしさ　192
田辺聖子「欲しがりません勝つまでは」　夢を育てる心　196
三浦哲郎「接吻」　秘密をかぎとる感性　200
あとがき　204

カバー&カット　こさかしげる

未熟な愛

――樋口一葉『たけくらべ』――

大人になるための試練

子どもが大人に脱皮するのは、社会を知ることでも、人生への自覚を持つことでもない。初めて人を好きになった時である。いつの世も、愛の痛みほど、人をせつなく豊かにしてくれるものはないのだ。

だが、つまらぬ大人の常識は、そんな未熟な愛までも禁断の木の実としてつみとろうとする。それが子どもにとって、どれほどかけがえのない滋養であるかも知らずに。彼等は大人のように愛の行く末までも考えようとしない。いいようのない胸の高まりの中で、恋することに恋しているのである。親にもいえず、友だちにさえ打ち明けられない悩み故に、未熟な愛は至純なまでの美しさを持つ。

それを見事に描き出しているのが、『たけくらべ』だ。ここには、子どもが大人になるための愛の真実がある。人を恋することの尊さがいきいきと迫ってくる。

『たけくらべ』は、明治二十六年頃の浅草・吉原かいわいを舞台にして、大黒屋の美登利という十四歳の少女と、それより一つ年上の竜華寺の信如、更には美登利より一つ年下の金貸しの子ども正太郎などをからませ、思春期のほのかな性のめざめを描いたものである。

ある雨の朝、信如は大黒屋の前で下駄の鼻緒を切ってしまう。格子越しにそれを見ていた美登利は、思わず布の切れはしをつかんでとび出す。正太郎たちの前では、あたかも女王のようにふるまっていた美登利なのに、なぜか口がきけない。

《それと見るより美登利の顔は赤う成りて、何のやうの大事にでも逢ひしやうに、胸の動悸の早くうつを人の見るかと背後の見られて、恐る恐る門の傍へ寄れば、信如もふつと振返りて、此れも無言に脇を流るる冷汗、跣足になりて逃げ出したき思ひなり。（中略）物いはず格子のかげに小隠れて、さりとて立去るでも無しに唯うじうじと胸とどろかすは平常の美登利のさまにて無かりき。》

そんなことがあって、しばらく後に、美登利は初潮を見る。もうだれとも遊びたくはない。家にとじこもっている美登利の胸はなぜかはりさけそうだ。ある霜の朝、門のところにさし入れてあった水仙を見て信如のことを思う。

《誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違い棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。》

なんというロマンチックな幕切れだろう。この小説を読んだ幸田露伴や森鷗外が、口を極めてほめたのも当然なほど、この特異な風俗と性にめざめる少年少女のみずみずしい内面描写はいく度読み返してみてもあきることがない。

愛をたしかめあわずして、別れいく美登利と信如、それはまさに子どもが大人になるための試練である。汚れた愛からは決して得ることのできない貴重なかなしみなのだ。

子どもの挑戦

スターのブロマイドにあこがれ、恋愛ごっこのプレゼントをよろこんでいる今日の子どもたちに、このせつなさが、どこまで通用するのか、わたしにはわからない。だが、彼等の中にも必ずや信如や美登利はいるはずである。

にもかかわらず、私たち大人は、子どもの性のめざめを語るとき、ともすれば社会病理の教育の場で語ろうとする。子どもの心をわからずして肉体的な早熟さばかりを心配する。愛は教わるものでも、まねるものでもないはずだ。みずからが傷つき、悩み、闘いながらつかみとっ

ていくものである。流行歌で、どんなに初恋を美化しようとも、所詮は遊びの歌にすぎない。

わずか二十四歳で彗星のように消えていった樋口一葉だが、彼女が『たけくらべ』で描き出した世界は、どんな恋愛小説よりも確かな力で、愛とはなにかを語りかけてくれる。子どもにとって初恋が、どれほど人間を成長させるものかを教えてくれる。大人の恋愛すらタブー視された時代にあって、子どもの性のめざめを、こんなにもみずみずしく描き出すことができたのはなぜか。それは彼女が子どもの世界にこそ人間らしい真実があると信じていたからだ。不幸な生活に耐えながらもみずからの性のめざめを忘れようとしなかったからである。

『たけくらべ』は、子どもを主人公にしながら、大人の恋愛小説にもひけをとらない愛の文学として画期的な作品である。いいかえれば、わけしりの大人に対する子どもの挑戦でもある。子どもは大人が考えるほどひ弱でも、世間知らずでもないのだ。

樋口一葉（ひぐち　いちよう）
小説家、歌人。明治五年東京に生まれる。本名なつ。中島歌子の主宰する萩の舎塾で和歌和文を習い出色の歌才を示す。短編小説「大つごもり」「にごりえ」中編小説「たけくらべ」を発表し、一流作家となるも二四歳で病歿。
（一八七二――九六）

感情で学ぶ性

——森鷗外『キタ・セクスアリス』——

性をテーマにした文学

赤ちゃんはどうして生まれるか、その疑問につき当った時、コウノトリが運んでくるという母親の言葉を信じる子どもの目は美しい。そのファンタスティックなウソが、ウソであることをみずから知る日まで、だまって見守ってやれる親であってもいいように思う。

知識で教えられる性よりも、感情で学ぶ性の方が、どれだけ人間を豊かにしてくれることか。子どもに関する性についての本のつまらなさは、科学的・心理的であっても、生身の人間の持つ情緒を感じさせてくれないことだ。まして子ども向きの絵本ともなると、稚拙な解剖図といったイメージしかわきあがってこない。

『キタ・セクスアリス』の主人公金井湛は、ドイツから送られてきた性欲的教育問題の報告書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

を読んで考える。

《話は下級生物の繁殖から始めて、次第に人類に及ぶというのである。初に下級生物を話すというが、唯植物の雄蕊雌蕊の話をして、動物も亦復是の如し、人類も亦復是の如しでは何の役にも立たない。人の性欲的生活を詳しく説かねばならぬというのである。》

そこで自分の性欲的生活の歴史を書こうと思いつく。性的教育ではない、性欲的教育というところに、この小説のおもしろさがある。いうならば感情教育としての性をテーマにした文学ということになる。

《じいさんが僕にこう言った。「坊様。あんたあお父さまとおっ母さまと夜何をするか知っておりんさるかあ。あんたあ寝坊ぢゃけえ知りんさるまあ。あはゝゝ。」じいさんの笑う顔は実に恐ろしい顔である。（中略）男と女とが夫婦になっていればその間に子供が出来るということは知っている。併しどうして出来るか分らない。じいさんの言った事は其辺に関しているらしい。其辺になんだか秘密が伏在しているらしいと、こんな風に考えた。》

七つの時に、子どもが生まれることの疑問を自覚させられた僕はやがて十歳になり、春画をそれとわからぬままに面白くながめ、ついには女の子に縁からとびおりさせるのである。

《「こうして飛ばんと、着物が邪魔になっていけん。」

僕は活発に飛び降りた。見ると、勝はぐづぐづしている。

「さあ。あんたも飛びんされえ。」

勝は暫く困ったらしい顔をしていたが、無邪気な素直な子であったので、とうとう尻をまくって飛んだ。僕は目を円くして覗いていたが、白い脚が二本白い腹に続いていて、なんにも無かった。僕は大いに失望した。》

年齢とともに、深く目ざめていく性の意識が、手にとるように描かれ、鷗外の育った時代や環境を越えて、身につまされる。とりわけ幼児から少年時代の情感がみずみずしい。

性の悩みからの成長

いうまでもなく、鷗外がこの小説を書いた動機は性の文学を解放するためでも、性欲的教育そのものを描くためでもない。性本能の衝動性を重視する当時の自然主義文学運動に対するアンチテーゼであり、その本能を意志によって押さえるところに人間のあるべき姿を見ようとする禁欲的なおもむきのあることを否定できない。

にもかかわらず、子どもの性が他人からの押しつけや教育によっていびられるものではなく、みずからの自我覚醒によって、より人間らしく成長していくことを見事にとらえている。性はいんびで複雑な故に、限りないロマンすら与えてくれる。子どもの身近かなところで、卑猥にささやかれる大人の言葉一つさえ、どれほど子どもの感情を刺激し、大人になることへの恐

れとあこがれに悩まされることか。いささか露出的すぎるヌードポスターであっても、その前にたたずむ子どもたちのすべてが、享楽的な性を求めているわけではない。彼等は彼等なりに、全感情をかたむけ、人間であることの本質を見きわめようとしているのかも知れないのだ。見てはいけないもの、見せてはならないタブーこそが、子どものスリルに満ちた冒険なのである。

ならば、その冒険に立ち向かえるしたたかな精神力、（といっても、正しい性知識やモラルではない）つまりは大人になるとはどういうことかを、素朴に実感できる力を養ってあげるのが先決ではないのか。だれにも相談できず、みずから苦しみ、考えていくプロセスに耐える子どもであってほしい。非行化という視点で、子どもの性を考えすぎるところから、すぐれた文学は生まれてこない。『キタ・セクスアリス』を読むたびに、子どもにとっての性の悩みが、どれほど人間を大きく豊かにしてくれるものかを、教えられるのである。

森鷗外（もり　おうがい）
小説、劇作家、翻訳家、軍医。文久二年石見国（島根）津和野に生まれる。本名林太郎。号は鷗外の他千朶山房主人、観潮楼主人など。東大医学部卒後ドイツに留学、のちに陸軍軍医総監まで進む。著は「舞姫」「山椒大夫」「阿部一族」など多数。（一八六二――一九二二）

愛すべき母

――夏目漱石『硝子戸の中』――

母は永遠の女神

いつの時代も、子どもにとって、母は絶対である。「おふくろ」、「かあさま」、「おかあさん」と呼び方はさまざまでも、どこか甘ずっぱいにおいがつきまとう。とりわけ男にとって、母は永遠の女神である。

両親の歓迎しない子どもとして、生まれた時から里子や養子に追いやられた漱石にとっても、母は最も愛すべき存在であった。

《母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿って行っても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には母の水々しい姿を覚えている特権が遂に与えられずにしまったのである。》

と、書きながらも、

《悪戯で強情な私は、決して世間の末っ子のように母から取扱われなかった。それでも宅中で一番私を可愛がってくれたのは母だという強い親しみの心が、母に対する私の記憶の中には、何時でも籠っている。》

と、いわずにはいられない。

子どもは常に母を美化し、やさしく温かな人にしたがる。どれほどつめたくあしらわれようと、子どもにとっては、かけがえのない、いのちなのである。

『硝子戸の中』は『こゝろ』を書き終わってから書かれた漱石の最晩年のエッセーといわれている。その小説中で主人公の先生を自殺させてしまった漱石には、もはや死へのおそれも、生きることへの執着もなかった。人生のさとりにも似た心境の中に浮かんでくるさまざまな思い出の中で、彼もまた母をこよなく愛している自分に気がついたのだ。それ故、子どもの頃の母の追想が、もっとも印象深い。

やさしさは物より心

《或時私は二階へ上って、たった一人で、昼寝をした事がある。其頃の私は昼寝をすると、よく変なものに襲われがちであった。（中略）私は何時何処で犯した罪か知らないが、何しろ自

分の所有でない金銭を多額に費消してしまった。それを何の目的で何に遣ったのか、其辺も明瞭でないけれども、子供の私には到底償う訳に行かないので、気の狭い私は寝ながら大変苦しみ出した。そうして仕舞に大きな声を揚げて下にいる母を呼んだのである。（中略）母は私の声を聞き付けると、すぐ二階へ上って来てくれた。私は其処に立って私を眺めている母に、私の苦しみを話して、どうかして下さいと頼んだ。母は其時微笑しながら、「心配しないでも好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云ってくれた。私は大変うれしかった。それで安心してまたすや〳〵寝てしまった。》

あの気むずかし屋の漱石とは思えない素直なよろこびがあふれている。長い間、おばあさんと信じこんでいた人が、実の母親であることを知った時、わびしかった幼児の風景にほのぼのとした明かりがともったに違いない。悪事をとがめるどころか、「いくらでも金を出してやる」といってくれた母のひとことで安心しきって眠る姿に善悪を超越した母子の絆の深さを思わずにはいられないのだ。にもかかわらず、その絆を、みずから断ち切ってしまう母にとって、子どもとはなにか。いかほど自分に忠実な生き方であっても、母を捨てたものは、子どもの敵である。母を敵として生きることほど苛酷な人生はないのだ。貧しい生活に耐えられても、貧しい心に耐えぬける力を持てないのが子どもである。母に捨てられた子どもは、それに耐えているのではなく、敵に対する怒りをもやすことで、みずからをはげましているのだと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c